



葉山嘉樹全小説紹介

目次：001『牢獄の半日』／002『淫売婦』／003『セメント樽の中の手紙』／004『出しやうのない手紙』／005『そりやあ何だ』／006『追跡』／007『住むべき処を求めて』／008『労働者の居ない船』／009『赤い荷札』／010『春の悩み』／011『正札つき貴婦人』／012『支那人の糞』／013『眼』／014『山抜け』／015『どこも冷たい』／016『むごたらしい出来事』／017『遺書』／018『馬鹿を見たけりやこいつ等を見ろ』／019『糲』／020『港町の女』／021『校正係』／022『浚渫船』／023『海に生くる人びと』／024『刺された男』／025『誰が殺したか』／026『乳色の靄』／027『プロレタリアの乳』／028『生爪を剥ぐ』／029『マドロスと鼠』／030『焼けた金で払ふ』／031『印度の靴』／032『狂人』／033『被害者』／034『躰の話』／035『散歩』／036『田舎者が都会を見る』／037『死屍を食ふ男』／038『首を売つた話』／039『坑夫の子』／040『苦闘』／041『桜の咲く頃』／042『仁丹を追つかける』／043『鼻を覗ふ男』／044『天の怒声』／045『別離』／046『火夫の顔と水夫の足』／047『無風帯を行く船』／048『船の犬「カイン」』／049『電燈の油』／050『鴨猟』／051『ハンケチ泥棒』／052『暗い顔』／053『独房語』／054『小作人の犬と地主の犬』／055『海底に眠るマドロスの群』／056『恋と無産者』／057『人間肥料』／058『悪夢』／059『迷へる親』／060『波止場の一日』／061『冬の労働一景』／062『暗い出生』／063『無銭飲食者同盟』／064『床屋』／065『けだものの尻尾』／066『サンパンの難破』／067『優秀船「狸」丸』／068『移動する村落』／069『便器の溢れた囚人』070『歪みくねつた道』／071『泡になる犠牲』／072『借家探し奇譚』／073『猫の踊り』／074『夢中時代』／075『口が重くなる』／076『地下水』／077『萌芽』／078『空腹と胃酸』／079『今日様』／080『屋根のないバラック』／081『敷居を盗まれる』／082『烏屋の一夜』／083『山谿に生くる人々』／084『二重に搾られる一景』／085『水路』／086『人間の値段』／087『小盗不成』／088『窮鳥』／089『泥棒の上前を撥ねた話』／090『負けた』／091『赴任命令』／092『結婚式』／093『紐のついた命』／094『濁流』／095『登音』／096『窮鼠』／097『裸の命』／098『出発』／099『馬鹿気た話』／100『氷雨』／101『万福追想』／102『峽底』／103『暗い朝』／104『多角形経営の緒言』／105『子狐』／106『影』／107『慰問文』／108『山の幸』／109『雹害』／110『海と山と』／111『稲』／112『流旅の人々』／113『部落の顔』／114『還元記』／115『墓掘り当番』／116『安ホテルの一日』／117『食ひ気と色気』／118『話の華』／119『最後の聖餐』／120『凡父子』／121『潔斎』／122『子を護る』／123『寄生虫』／124『義侠』／125『不思議な村—「義侠」続篇—』／126『颯風』／127『海に行く』／128『海の家へ』／129『朋あり』／130『多産系子孫分布図』／131『懸垂』／132『深井農事指導員』／133『ある日の開拓村』／134『開拓団に於ける生活』

001『[牢獄の半日](#)』

『文芸戦線』、大正13（1924）年10月。名古屋刑務所収監中に襲ってきた大地震。警官らはいち早く避難し、収監者は取り残される。その不正義を声を張り上げて徹底的に弾劾する波田の戦いが監獄のなかで始まる。葉山の処女作といってもいい短篇。筑摩書房版全集、第一巻。

002『[淫売婦](#)』

『文芸戦線』、大正14（1925）年11月。欧州航路を終えたばかりの若きマドロス・民平が、ふとしたきっかけから、謎の男たちに連れられ、ある淫売婦の下を訪ねる。何とかして女性を男たちから解放させてやろうとするが、そこにはプロレタリアの不条理で悲しい共同生活の実態があった。葉山の出世作。筑摩書房版全集、第一巻。

003 『[セメント樽の中の手紙](#)』

『文芸戦線』、昭和1（1926）年1月。松戸与三がセメント樽あけの仕事をやっていると、一個の樽の中にあつた小箱を発見する。その中身は、自分の恋人が事故にあつたという女工からの「お願ひ」の手紙だった。プロレタリア文学の傑作として名高い。筑摩書房版全集、第一巻。

004 『出しやうのない手紙』

『文章往来』、昭和1（1926）年2月。出獄後、妻と子供二人が行方不明になってしまった。なぜ？ そして、何処へ？ 夫は、面会で会ったときの思い出を中心に、今はいない妻へ向けて「出しやうのない手紙」を痛切にしたためる。筑摩書房版全集、第一巻。

005 『そりやあ何だ』

『文芸戦線』、昭和1（1926）年3月。飯場での一景を描いた小品。そこは日本人と朝鮮人とが、ときに争いつつも、搾取の重圧や資本主義の仕組みによって「インターナショナル」な結束を固くする逆説的な場所であつた。葉山の朝鮮人観が伺える一作。筑摩書房版全集、第一巻。

006 『追跡』

『無産者新聞』、昭和1（1926）年3～4月。BはPに追跡されている。しかし、ふとしたことから二人は、アメリカ帰りの病労働者であつたBの故郷に向けて共に列車旅をすることになる。Bはそこで自らの死を受け入れる覚悟でいた。筑摩書房版全集、第一巻。

007 『住むべき処を求めて』

『戦車』、昭和1（1926）年4月。年老いた山本と若き金床、二人は「けつを割ろう」、つまり労働現場から逃走しようと画策する。うまく停車場にたどりつくものの、山本は汽車に潜り込むが追っ手に捕まり、金床は線路沿いをひとり歩いていく。筑摩書房版全集、第一巻。

008 『[労働者の居ない船](#)』

『解放』、昭和1（1926）年5月。航行中の第三金時丸のなかで猛威を振るうコレラ菌を前にして、なすすべなく海上労働者たちは倒れていく。最終的に船に残つたのは、半狂人の船長とミイラのような労働者、そして夥しい数の腐った死体だった。筑摩書房版全集、第一巻。

009 『赤い荷札』

『文章往来』、昭和1（1926）年5月。S刑務所の独居房でK・G君が自殺した。労働運動仲間で、

同じ刑務所に収監されていた「私」は、G君の思い出を回想しながら、その非情的な結末を悔やむ。火薬や硝子を運送するさいに貼り付ける「取扱注意」の赤い荷札、人間に札がつくのはどんなときなのか。筑摩書房版全集、第一巻。

010『春の悩み』

『文芸市場』、昭和1（1926）年5月。二人の子供を餓死させてしまったプロレタリアの「私」は罪の意識から自暴自棄になるが、結果、死ぬことも狂うこともなく過ぎ去っていく日常を生きるしかない。筑摩書房版全集、第一巻。

011『正札つき貴婦人』

『女性』、昭和1（1926）年5月。電車に乗っていると美しい立派な貴婦人が乗ってきた。しかし、その膝あたりには980円の値札がついていた。それは人間全体の価値なのだろうか？ ユーモラスな読後感のある小品。筑摩書房版全集、第一巻。

012『支那人の糞』

『淫売婦』、春陽堂、昭和1（1926）年7月。波田民平が三度目にN監獄に収監されていた頃のこと、そこに収監されていた支那人が与えてくれる所作に随分救われながら、民平は地震が起きても収監者を開放しない非人道的な典獄との終わらない面会に臨む。筑摩書房版全集、第一巻。

013『眼』

『淫売婦』、春陽堂、昭和1（1926）年7月。シンガポール行きの船のなかで、機関部の吉田はいやいやながら仕事をこなす。しかしそんな中で傍若無人なチーフへの怒りが爆発するトラブルが生じる。後半は伏字が連続し、内容が判明でない短篇。筑摩書房版全集、第一巻。

014『山抜け』

『淫売婦』、春陽堂、昭和1（1926）年7月。木曾のある村で山抜け（山崩れ）が生じ、多くの村民や家々が土の下に埋まる。少女とし子の家も例外ではなかった。とし子は孤児となり、学校にも通えなくなる。自然のなかで生きていくことの厳しさを説く。筑摩書房版全集、第一巻。

015『どこも冷たい』

『淫売婦』、春陽堂、昭和1（1926）年7月。犬に吠えられた「彼」は、なんとなしに憤怒し、追いかけるうちに場違いなレストランに入ってしまう。侮辱と共に店の大男に暴力的に追い出された「彼」は、店へ舞い戻り、鉄管の復讐の一撃を食らわす。筑摩書房版全集、第一巻。

016『むごたらしい出来事』

『淫売婦』、春陽堂、昭和1（1926）年7月。夜中、男は、ある別荘の塀の上で動く猫を発見し、戦慄する。男は毎夜、猫の飯を盗み食う一六歳の浮浪者だったのだ。どん底の生活のなかで、男

は行き当たりばったりの生活をやめようと決心する。筑摩書房版全集、第一巻。

017『遺書』

『淫売婦』、春陽堂、昭和1（1926）年7月。自殺を決心した男が、取り残されるだろう四歳と三歳の二人の子供、そしていつの間にか家出して行方知らずとなってしまった妻に宛てて書き残す遺書。死にぎわに際して綴られる饒舌。筑摩書房版全集、第一巻。

018『馬鹿を見たけりやこいつ等を見ろ』

『淫売婦』、春陽堂、昭和1（1926）年7月。秋の木曾、葬列は山道を通って焼き場へ向かう。土方の女房が死んだのだ。初七日が終わり、娘の嫁入りが近づく。仲人と婿の人間的善良さをスケッチする掌篇。筑摩書房版全集、第一巻。

019『糰』

『文章倶楽部』、昭和1（1926）年8月。ある夢を見たことを思い出す小説。刑務所から出て、一人歩いていると、道で若い女性に出会う。彼女に食べ物を請うと、糰（飯を乾かして保存用にしたもの）をもらえた。目覚めてもその味は忘れられない。筑摩書房版全集、第一巻。

020『港町の女』

『文芸春秋』、昭和1（1926）年8月。船乗りの三上と小倉とが港町のある飲食店兼売春宿を訪ねる。女っ気のない労働環境のなかで、売春婦は例外的に自分たちを受け入れてくれる稀有な女性であった。長篇『海に生きる人びと』の一部を切り出した短篇。筑摩書房版全集、第一巻。

021『校正係』

『文章往来』、昭和1（1926）年8月。都会のビルにいる総長をメスで脅して、解雇をやめさせる署名を手に入れようとする村長・木蘇氏の暗躍。永久に知られない、知られることを望まない社会の「校正係」の物語。筑摩書房版全集、第一巻。

022『[浚渫船](#)』

『文芸戦線』、昭和1（1926）年9月。足を怪我して、結果、雇止めをくらった男の呪怨を基調に、労働者の生を問いかける一作。遊んでいては食えない、怪我しても働かなくてはならない。一生活者のリアリズム。筑摩書房版全集、第一巻。

023『[海に生きる人びと](#)』

改造社、昭和1（1926）年10月。室蘭・横浜航路の石炭貨物船万寿丸で働くマドロスが、残忍な船長に反抗し、団結して闘争するために立ち上がる。小林多喜二『蟹工船』に影響を与えたプロレタリア文学の金字塔。筑摩書房版全集、第一巻。

024『刺された男』

『文芸市場』、昭和1（1926）年10月。ブラリと田舎道を散歩する。農夫たちは生活に喘いでいる。散歩なんてしている場合か、と思いつつ、何の目的もなく彷徨うが、瞬間、蜂が胸の辺りを刺し、その光景に自ら可笑しみを覚えてしまう。そんな日常的風景を切り取った小品。筑摩書房版全集、第一巻。

025『誰が殺したか』

昭和1（1926）年11月～昭和6（1931）年2月。貧困に喘ぎながらも、正義感故に労働運動に邁進する父親。運動の末に捕まり、監獄生活を終えた彼に待っていたのは、愛する子供の餓死という残酷な現実だった。子供を殺したのは誰か？ 自伝的な要素をふんだんに取り込んだ中篇小説。筑摩書房版全集、第一巻。

026『乳色の靄』

『新潮』、昭和1（1926）年12月。四十年來の猛暑日、かつて浮浪罪で拷問され、今は警察に追われている男は、汽車のなかで、労働争議を計画する若い労働者と出会う。世代差を感じつつも、男はその小僧に惹かれていく。運動に意識的な主体とそうでない主体との対比を描く。筑摩書房版全集、第一巻。

027『プロレタリアの乳』

『改造』、昭和1（1926）年12月。工場が破産し引き移らねばならない労働者の男は、家族と一緒に汽車に乗る。だが、牛乳を買い忘れたせいで子供は腹をすかして泣き出し、家族はいたたまれない思いを感じるが、親切な車掌が手助けしてくれて何とか牛乳を手に入れる。ささやかな連帯を描く。筑摩書房版全集、第一巻。

028『生爪を剥ぐ』

『不同調』、昭和2（1927）年1月。労働運動に熱心な吉田の元にM署の高等係の中村が訪れ、署への同行を求められる。しかし、吉田が家を離れてしまえば老母や子供はどうなるのか。仲間の到着を待つことなく、別れの時は残酷にやって来る。筑摩書房版全集、第一巻。

029『マドロスと鼠』

『文芸公論』、昭和2（1927）年1月。日本には老朽船が多い、そのような新聞記事が小説家の橋本によって紹介された後、三年前に別れた大浦仁平の、遭難した船に乗り込み九死に一生をえた経験談が紹介される。穴の空いたボロ船の実情を訴える。筑摩書房版全集、第一巻。

030『焼けた金で払ふ』

『週刊朝日』、昭和2（1927）年1月。1916年の冬、郵船会社の汽船はカルカッタのドックに入る。船内コックの田浦四方一は陸上に降り、買い物をしたあと、クリー（単純労働者）の俵をこ

き使っていたが、俵賃を踏み倒そうとするが失敗する。筑摩書房版全集、第一巻。

031 『印度の靴』

『世界』、昭和2（1927）年2月。インド人であるラム・サラップは、アメリカで哲学を勉強するために、船客として日本郵船会社S丸に身を託す。水夫見習いである羽生民夫は、ラム・サラップとの交流を通じて、とりわけ彼の貴族靴を通じて、自分が属す日本社会を捉え直す。筑摩書房版全集、第一巻。

032 『狂人』

『文芸戦線』、昭和2（1927）年2月。「もく」と呼ばれている囚人は、オナニー常習者で、布団の綿を食べたり、三昼夜怒鳴ったりする狂人である。監獄よりも病院に入れるべきだが、偉い人間はその判断を下さない。監獄生活の小景を切り取った小品。筑摩書房版全集、第一巻。

033 『被害者』

『東京朝日新聞』、昭和2（1927）年2月。巡査部長を長く勤めた「私」は、恩給をもらい、工場の人事課に再び就職した。その「私」の家に、かつて取り調べをしたことのある泥棒が入った。「中身は馬鹿に貧弱」という書置きで馬鹿にされるユーモラスな一篇。筑摩書房版全集、第一巻。

034 『躰の話』

『サンデー毎日』、昭和2（1927）年3月。躰（いざり、足腰が立たない障害者）の乞食の半生を聞く短篇。乞食の父親に対する憎悪と、その父の死に際して感じられる複雑な心情が語られる。世代間で連鎖する貧困を問題提起している。筑摩書房版全集、第一巻。

035 『散歩』

初出不明。ぶらぶら街を歩いていると、丁稚らしい青年や小僧風の少年といった「青ざめた人々」に出くわす。過度な労働は人々から血を奪っているのだ。原稿用紙五枚に満たない小品。筑摩書房版全集、第一巻。

036 『田舎者が都会を見る』

初出不明。田舎から東京に出てくると驚くことばかりある。電車、自転車、モーターサイクル、自転車。様々な人々が行き交う垣塙的な都会という場所でどう生き抜けばいいのか。短い小品。筑摩書房版全集、第一巻。

037 『[死屍を食ふ男](#)』

『新青年』、昭和2（1927）年4月。県に二つしかなかった中学校、その寄宿生の何人かが消えてしまう珍事件が起こる。寄宿生の安岡は同室の深谷が深夜に室を抜け出すのを怪しく思い、後を

つけると、安岡は墓地に赴き死者の死肉を食べ始めた。珍しいホラー風の一作。筑摩書房版全集、第一巻。

038 『首を売った話』

初出不明。帳付けを職業にしている北沢は毎日「いやいや」をしている。費用と手数料のやりとりで多くの土方と日々戦っているのだ。ある日、北沢はつけ込み帳に「クビ 一つ イハイ」という謎の文句を発見する。筑摩書房版全集、第一巻。

039 『坑夫の子』

『文芸戦線』、昭和2（1927）年5月。発電所の掘鑿が進むにつれて、使用するダイナマイトも大量になっていく。しかし、ふとした不注意でそれは死につながる。秋山と小林という坑夫の死を通じて、労働者の過酷な現実を描く。筑摩書房版全集、第二巻。

040 『苦闘』

『中央公論』、昭和2（1927）年5月。運動家の広田敏夫が勾引されてから、山野歳夫とよし子の生活には暇がなくなった。子供の安全な生活と労働運動の要求という天秤で揺れながらも、「闘へ。最後まで」という広田からの手紙が胸を打つ。筑摩書房版全集、第二巻。

041 『桜の咲く頃』

『週刊朝日』、昭和2（1927）年6月。衆議院議員である岩井薫三が拘引された。四〇歳にして驕慢な美貌を誇る岩井の夫人のはつ子はその面会に赴く。他方で、岩井の別荘番をして家族を支える長田はる子は自身の境遇に絶望していた。筑摩書房版全集、第一巻。

042 『仁丹を追っかける』

『文芸戦線』、昭和2（1927）年7月。土木建築の工事を請け負う「組」の部長は、広告に出てくる人形に似ているために、「仁丹」と呼ばれていた。会社の上層部と現場で働く労働者の狭み撃ちによって生じる苦い思いを描く。筑摩書房版全集、第二巻。

043 『鼻を覗く男』

『新潮』、昭和2（1927）年8月。駅のプラットホームである混血児の女学生に恋した男をコミカルに描く。ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』のドミトリーに自身をたとえながら紡がれる、恋の始まりと終りの物語。筑摩書房版全集、第二巻。

044 『天の怒声』

『改造』、昭和2（1927）年9月。監獄のなかで営まれる、意図せぬ奇妙な共同生活。一見退屈に見える獄中でも様々な小事件が起こっている。箸と蠅の十字架、生活の唄、十五房の永島。監獄内の生活を丁寧に描く短篇。筑摩書房版全集、第二巻。

045 『別離』

『若草』、昭和2（1927）年10月。社会主義者の夫は刑務所に入るために、明後日、旅立たなければならぬ。後に残す老母と、妻と、別れのご馳走の「魚」に喜ぶ子供のことを心配しながら、別離の時間をいとおしむ小品。筑摩書房版全集、第二巻。

046 『火夫の顔と水夫の足』

『文芸戦線』、昭和3（1928）年1月。マドロスとして五年も一緒に働いていた無二の親友、福田民夫。彼は顔に大きな火傷を負い、「私」は片足を事故でなくした。海上で大怪我を負った二人が久しぶりの邂逅を果たす。社会のアウトサイダーたちのささやかな連帯を暗示。筑摩書房版全集、第二巻。

047 『無風帯を行く船』

『週刊朝日』、昭和3（1928）年1月。カルカッタ航路の船が熱気の中を進んでいく。新米のセーラーである橋本を中心にボースンやボーイ長やコックといった船員たちのささやかなコミュニケーションの様子が切り取られる。筑摩書房版全集、第二巻。

048 『船の犬「カイン」』

『改造』、昭和3（1928）年2月。船長が連れてきた雌犬「カイン」は、船員たちから愛玩されている。しかし、では、その乗組員たちはどうか。犬と人間の対比によって、海上労働の悲惨な現実をアイロニカルに描く。筑摩書房版全集、第二巻。

049 『電燈の油』

『文芸戦線』、昭和3（1928）年4月。自分たちは砂を掘っているつもりかもしれないが、本当は自分の墓穴を掘っているだけなのではないか。工事場での抑圧、家庭を巢食う病魔。搾取から抜け出そうとするプロレタリア像を労働者・橋本に託して描く。筑摩書房版全集、第二巻。

050 『鴨猟』

『文芸春秋』、昭和3（1928）年4月。船への積込の途中、マドロスたちは水鳥の鴨を生け捕りにする遊びにふける。しかし取った鴨は船長によって食べられてしまった。M丸でのストライキの発端になった小さな一つのエピソード。筑摩書房版全集、第二巻。

051 『ハンケチ泥棒』

『週刊朝日』、昭和3（1928）年6月。一等船客のひとり、バートン夫人のハンケチーフが盗まれた。冤罪を疑われたボーイの「私」は、理不尽な処罰を受けるなかで、同じ船にも関わらず厳然と存在する階級的差異を感じる。筑摩書房版全集、第二巻。

052 『暗い顔』

『サンデー毎日』、昭和3（1928）年7月。同じ船に乗っていた同僚マドロスの三上を、自分の仲間に引き入れようとして書かれた書簡体風の短篇。三上の個性とマドロス特有の習性がよく描かれている。筑摩書房版全集、第二巻。

053 『独房語』

『文芸戦線』、昭和3（1928）年9月。監獄には様々な人がやって来る。労働争議で捕まった人、非合法の博打で捕まった人。偶然居合わせた囚人たちが織り成す会話の妙。踏みつけられたときほど、輝き始める。筑摩書房版全集、第二巻。

054 『小作人の犬と地主の犬』

『文芸戦線』、昭和3（1928）年11月。長篇小説「青年前衛隊」の冒頭になるはずだった短篇。鳥を追いかけているのは地主の犬か、それとも小作人の犬か。運動家の小松田光一郎の眼を通して語られる、階級対立の現実。筑摩書房版全集、第二巻。

055 『海底に眠るマドロスの群』

『改造』、昭和4（1929）年1月。海底にはどれくらいの人間の死体が沈んでいるのか。陸から見える海と海上での海の姿はまるで違う。命に関わる危険と隣り合わせのマドロスの仕事を、迫力ある筆力で描いていく中篇小説。筑摩書房版全集、第二巻。

056 『恋と無産者』

『福岡日日新聞』、昭和4（1929）年1～2月。無産者の古屋新作は町の有力者の娘である沢田ゆき子に恋する。身分違いの恋でありながらも、古屋の送った一枚のラブレターで事は大きく動き出す。階級性を家の象徴で巧みに捉えた中篇。筑摩書房版全集、第二巻。

057 『人間肥料』

『文芸戦線』、昭和4（1929）年2月。組合の研究会に誘われ、貧民街に赴くと、そこには身体的障害を抱えた工場労働者たちが集う「化物屋敷」があった。人間を肥料にして成長していく資本主義の非人道性を暴く。筑摩書房版全集、第二巻。

058 『悪夢』

『週刊朝日』、昭和4（1929）年3月。マドロスの「私」が船上でボロワイヤー整備の仕事をしている最中、誤ってそれを踏んづけ足を負傷し、仕事ができなくなる。その自虐の末、悪夢を見、自殺未遂に至る。働くことに強迫観念を感じる男の話。筑摩書房版全集、第二巻。

059 『迷へる親』

『新潮』、昭和4（1929）年4月。木曾の工事現場で仕事をしに引越ししてきた波田一家。しかし

、飢えた子供と病んだ老母をどうやって養っていけばいいのか。絶望に圧迫されながらも必死に家族を支えようとする父親の姿が描かれる。筑摩書房版全集、第二巻。

060『波止場の日』

『週刊朝日』、昭和4（1929）年7月。波止場にあるどの船も出航旗を掲げていた。フィリピン人、中国人、インド人、様々な外国人が行き交う港での光景が、マドロスの波田の眼を通して描かれる。瞬間的に訪れる国際的コミュニケーションの空間。筑摩書房版全集、第二巻。

061『冬の労働一景』

『文芸戦線』、昭和5（1930）年1月。正月の元日。にも関わらず、他の飯場とは違って吉田飯場には休みはなかった。体の芯から凍る川堀りで、労働者の肉体が酷使される。酷薄な労働現場を切り取った小品。筑摩書房版全集、第二巻。

062『暗い出生』

『新青年』、昭和5（1930）年3月。お初は臨月を迎えていたが、夫の長吉は長らく失職していた。しかも、貧困に悩み、つい万引きしてしまったお初は警察署に拘引されてしまう。そして、留置所のなかでプロレタリアの赤ん坊が誕生する。筑摩書房版全集、第二巻。

063『無銭飲食者同盟』

『文芸戦線』、昭和5（1930）年6月。無銭飲食は珍しいものではない、しかし無銭飲食者同盟の組織は珍しい。無銭飲食の戦略を練りながら、プロレタリアの不屈の精神をコミカルに描いていく短篇。筑摩書房版全集、第二巻。

064『床屋』

『文学時代』、昭和5（1930）年10月。床屋に入った「私」はどうやら新人らしい理髪師に当たる。他の客をさばく姿を見つつ、自分の顎を剃り始めた理髪師にヒヤヒヤし、途中で床屋を飛び出してしまふ小話。筑摩書房版全集、第二巻。

065『けだものの尻尾』

『改造』、昭和5（1930）年12月。シンガポール行の船のなかで営まれる、マドロスの生活を切り取った短篇。雷は電気ではなく雷獣だと主張するボースンの話が象徴的に活きている。伏字が多い。筑摩書房版全集、第二巻。

066『サンパンの難破』

『文学時代』、昭和6（1931）年1月。陸は失業者の「デパート」。仕方なしにサンパンで寝起きし、その船頭をしていた「私」は「チャンス」を求めて、大きな汽船を訪ねていく。しかし、そこには九死に一生をえるような出来事も起きる。筑摩書房版全集、第二巻。

067『優秀船「狸」丸』

『改造』、昭和6（1931）年4月。大型客船でボーイをする「私」を中心に、海上での珍事件が階級的視点から次々と語られていく。司厨長の部屋にあった狸の置物が、ミステリアスな事件を予告する。筑摩書房版全集、第二巻。

068『移動する村落』

『東京朝日新聞』、昭和6（1932）9月12日～昭和7年2月9日。山間部の水力発電所のダム工事現場を舞台に、離合集散を繰り返す労働者集団を村に見立て、花という魅力的な登場人物を配しながら、労働者の過酷な現実を描く長篇小説。筑摩書房版全集、第二巻。

069『便器の溢れた囚人』

『改造』、昭和6（1931）年9月。胃拡張に罹った囚人にとって、栄養は質よりも量が大事で、食事は雑役が分配することになっている。しかし、その彼と便器に関するちょっとしたトラブルが起きてしまう。独房のひとつのエピソード。筑摩書房版全集、第二巻。

070『歪みくねった道』

『改造』、昭和7（1932）年2月。波田は病に臥す妻のやす子を前にしても医者にみせる金が捻出できない。老母と子供を抱えつつ波田は金策に走る。しかしその外出中にやす子は遺書を残して、家出してしまう。筑摩書房版全集、第二巻。

071『泡になる犠牲』

『会議』、昭和7（1932）年3月。日曜にも関わらず、船長から火災訓練とボート訓練を課されるマドロスたち。しかしその訓練中に、意図せぬ事故が起ってしまう。訓練の努力が泡になる短篇。筑摩書房版全集、第二巻。

072『借家探し奇譚』

『週刊朝日』、昭和7（1932）年6月。家賃その他もろもろの滞納の末に、おやじの家族と他の同居人は三日以内に新たな新居を探さなければならない。食うことだけでなく、住むことにも大きな苦労がある。筑摩書房版全集、第二巻。

073『猫の踊り』

『日本国民』、昭和7（1932）年10月。猫に踊りを教え込むときは、焼けた鉄板の上に乗せる。しかし、無産者の生活も、その猫の踊りと一緒なのではないか。生活苦に喘ぐプロレタリアの泥臭さを描く。筑摩書房版全集、第二巻。

074『夢中時代』

『近代』、昭和7（1932）年10月。七、八年前に住んでいた借家には今はもっと大勢の人で住んでいるらしい。たまたま通りがかった家の思い出をきっかけに、一ヶ月ほど続いた、NやSとの金のない共同生活が語られる。筑摩書房版全集、第二巻。

075『口が重くなる』

『アサヒグラフ』、昭和7（1932）年11月。守銭奴の大川大助は自分のカネを奪われまいと、カネを金歯の形にして口内に隠している。しかし、金の価が暴騰し、金歯のついた自分の命を守るため口を嚙むようになっていった。アイロニーを感じさせる短篇。筑摩書房版全集、第二巻。

076『地下水』

『改造』、昭和7（1932）年12月。労働争議を行なった結果、波田のあとには尾行がつくようになった。世間の偏見や監視による不自由と戦いながらも、搾取の現実を変えるために男たちは地道な活動を続けていく。筑摩書房版全集、第二巻。

077『萌芽』

『労農文学』、昭和8（1933）年2月。四つになる子供が寝小便をし、兄はそれを庇って、折檻される。その二人の子供は、寄寓者で、秘密結社に加入してた嫌疑で捕まった父親の子供だった。切ない小品。筑摩書房版全集、第二巻。

078『空腹と胃酸』

『新潮』、昭和8（1933）年8月。運動家の越智九州生は胃酸が手放せない。辛抱しきれないほどの空腹を誤魔化すためだ。九州から東京への汽車の道中を語りながら、運動の過酷な現実をアイロニカルに描く。筑摩書房版全集、第三巻。

079『今日様』

『改造』、昭和8（1933）年10月。百姓の父親と未だに独り立ちできない息子との相克。楽しみは海の向こう側にあるのではない。イマココを大事にせよ、という父親の「今日様」的言葉に葉山文学への根本的な批評を認めることができる。筑摩書房版全集、第三巻。

080『屋根のないバラック』

『文芸春秋』、昭和8（1933）年11月。子供たちが自然と触れ合えるように、故郷となる家を拵えなければならない。借家住まいから脱し、一家の主としてバラックを立てようとする父親の悪戦苦闘を描く。筑摩書房版全集、第三巻。

081『敷居を盗まれる』

『現代』、昭和9（1934）年2月。子供に対して何もしてやれない不甲斐ない父親が飲み屋に行くと、その店の敷居がなくなるという事件が起きる。敷居さえも盗まれる不景気で困難な世の中

を暗示している。筑摩書房版全集、第三巻。

082『鳥屋の一夜』

『改造』、昭和9（1934）年2月。秋から冬にかけて、群をなして渡って来る鳥を網で捉えるための鳥屋。そこで山田とおたねの夫婦は別れる別れないの夫婦喧嘩を始める。『今日様』の一部になるはずだった短篇。筑摩書房版全集、第三巻。

083『山谿に生きる人々』

『改造』、昭和9（1934）年10月。天龍河畔の鉄道工事場で、大自然と格闘する労働者たち。そのひとり、大山に焦点化しながら、山崩れの危険や不安定な生活が営まれる。『海に生きる人々』の山岳版が描かれる。筑摩書房版全集、第三巻。

084『二重に搾られる一景』

『文学評論』、昭和10（1935）年5月。牧野一家の困窮にも関わらず、事務所が賃金を払わず、結果、親方の小川小吉も牧野に金を支払うことができない。仕方なしに牧野は金ではなく米を持ち帰る。搾取の構造性を示唆する小品。筑摩書房版全集、第三巻。

085『水路』

『改造』、昭和10（1935）年5月。水路工事を請け負ったものの、自分の所で働いている人夫たちに賃金が出せない。上が出さないのだ。上と下から挟まれる中間管理職の悲哀を描く。葉山『二重に搾られる一景』のテーマを共有している。筑摩書房版全集、第三巻。

086『人間の値段』

『文学評論』、昭和10（1935）年6月。太田高三と浜辺一は、ステッキで跳ね飛ばされた石が当たって重傷を負い、病院に担がれた山下五郎を探す。石を飛ばした同僚の森本の代わりに、できるだけ安い手打ち金で事を解決しようとする。資本主義への抗議を訴える中篇。筑摩書房版全集、第三巻。

087『小盗不成』

『先駆』、昭和10（1935）年6月。山田の時計が盗まれた。そこで山田は、伝説として伝わっている、釜で茹でた猫が盗人を噛み殺す黒猫のまじないを試そうと仕事場の一同に提案する。ウィットに富んだユーモラスな短篇小説。筑摩書房版全集、第三巻。

088『窮鳥』

『行動』、昭和10（1935）年7月。入浴をケチったために娘がトビヒにかかった。なんとか治してやりたいものの、医者にもみせられずただただ悪化していく。そんな中、訪問してきた中根大助から新しい家を建てる計画を持ちかけられる。特徴的な饒舌で語る短篇。筑摩書房版全集、第

三巻。

089『泥棒の上前を撥ねた話』

『今日様』、ナウカ社、昭和10（1935）年8月。天龍河畔の三信鉄道の工事場で働いているとき、主人公は特撰格という肩書きの画家・石川寒巖の訪問を受ける。後日、偽画で彼が捕まったことを知る。ちょっとした小品。筑摩書房版全集、第三巻。

090『負けた』

『中央公論』、昭和10（1935）年10月。諸外国に比べれば日本に貧民はいないと主張する骨董屋の男に対して反駁しようと試みるが、説得しきれない物語。「シュールリアリズム」についての言及がある。筑摩書房版全集、第三巻。

091『赴任命令』

『新潮』、昭和11（1936）年1月。東京で食い詰めて、都落ちをする途中の土方の男は、汽車のなかで、内務大臣の赴任命令を携えてると言う青年と出会う。互いの半生を語り、一期一会の時間が過ぎる、その切なさが描かれる。筑摩書房版全集、第三巻。

092『結婚式』

『改造』、昭和11（1936）年2月。花田飯場の酒村が花嫁をもらう。その結婚式に関して起こる一連の騒動を、緻密な文体で描く。舞台設定として貧しい住環境が特徴的に描かれている一作。筑摩書房版全集、第三巻。

093『紐のついた命』

『文芸』、昭和11（1936）年5月。原始時代がそのまま残っているような自然環境のなかで、土方飯場で働く久賀良誠の人生哲学を描く。書き手の小説家としての苦悩も示されつつ、生が一個で終わらない「尻尾」や「紐」の不思議が語られる。筑摩書房版全集、第三巻。

094『濁流』

『中央公論』、昭和11（1936）年7月。梅雨の天龍川の濁流にさいして、互いにいがみ合っていた労働者も農民も、共同作業で己の命を守る。生活のなかの連帯。自然の脅威にさらされながら、必死に働く人々を描く。筑摩書房版全集、第三巻。

095『登音』

『文芸』、昭和12（1937）年1月。村役場の小使の主人公が村長を見舞いに病院に行くと、珍しい事件に遭遇する。大きな足音を立てていた村の請負師の矢田と村長との間に何があったのか。日常のなかのちょっとしたサスペンス。筑摩書房版全集、第三巻。

096『窮鼠』

『日本評論』、昭和12（1937）年2月。中西仁は鮑のような外観をもつ長屋の家屋委員会の委員長であった。狭い空間に、大人数がひしめき合って住むプロレタリアの住環境。それを守るために中西は立ち上がる。筑摩書房版全集、第三巻。

097『裸の命』

『改造』、昭和12（1937）年3月。飯場で働く広田一郎と病弱で働けない中西を中心に、生の困難さについての問答が展開される。ドストエフスキー『罪と罰』が意識されている。また、殺人、つまり戦争に対する疑問が示唆されている。筑摩書房版全集、第三巻。

098『出発』

『新潮』、昭和12（1937）年4月。大山一家は都落ちするために、天龍河に向けて汽車に乗り込む。優生学があったら真っ先に処分されるだろうと思う父・大山岩夫に焦点化しながら、人間の生きるべき道を探る。筑摩書房版全集、第三巻。

099『馬鹿気た話』

『文学界』、昭和12（1937）年10月。私小説など書いている低調卑俗な時代ではない。その前提の上で語られる、ある山の中の村に行き着いたとき、大川に持ちかけられた安住の我が家建築計画。雑草のように存在する数多の日本人のうちのひとつの生。筑摩書房版全集、第三巻。

100『氷雨』

『改造』、昭和12（1937）年12月。河で魚釣りをする親子。生活は苦しく、父は心中や自殺を考えることもある。せめて子供たちの幸福を叶えてやれたらと考えるプロレタリアの親心が描かれる。筑摩書房版全集、第三巻。

101『万福追想』

『文芸』、昭和13（1938）年1月。爆薬で発破する山の工事はとても危険だ。その石の破片で怪我をした朝鮮人の子供の万福は、他方で胃を悪くして、ついには死んでしまう。どちらが原因で死んだのか。子供の万福の死に対して二つの立場があった。筑摩書房版全集、第三巻。

102『峽底』

『自由』、昭和13（1938）年3月。天龍河の岸で生まれた龍子は、工事が始まってから何人もの労働者の恋愛の対象となっていた。やがて龍子は権公との関係を深めていくが、しかし、その愛は実らない。筑摩書房版全集、第三巻。

103『暗い朝』

『改造』、昭和13（1938）年4月。寒さがこたえる冬の飯場の朝。東京から隠遁的な気持ちで働き

にきた花田は、太古の自然のなかにありながらも、「仙人」にはなれない人間関係への執着を感じる。飯場での一景を描く。筑摩書房版全集、第四巻。

104『多角形経営の緒言』

『日本文学』、昭和13（1938）年7月。百姓を始めるからには、時局に従い、多角形経営をやらなければならない。効率的な牧畜と養殖と果樹園の両立の構想。しかし、それを始めようとする主人公に大きな落とし穴が待っていた。寓話風の小品。筑摩書房版全集、第四巻。

105『子狐』

『新潮』、昭和13（1938）年9月。奴毛田は今年初めて百姓になった初老の男。隣の家の方平満作家の飼っていた鶏が狐に食われたという話を聞き、家族のために危険を冒すその親狐のことを空想する。筑摩書房版全集、第四巻。

106『影』

『知性』、昭和13（1938）年9月。漬物を天秤棒を担いで売っている藍屋は年のために、その行商ができなくなってしまった。妻は「低脳児」で近所からは馬鹿にされている。隣同志である奴毛田京作とその老人との切ない関係性を描く。筑摩書房版全集、第四巻。

107『慰問文』

『文芸』、昭和13（1938）年10月。中国に一兵卒として戦争に参加している定村銀三に宛てた慰問文。戦線に加われないことに負い目を感じながらも「民族の精神」に高揚する。転向後の葉山文学を象徴する、大きな問題を含んだ一作。筑摩書房版全集、第四巻。

108『山の幸』

『日本評論』、昭和13（1938）年11月。新たに引越した花田一家。花田はほとんど農村で暮らしたことがなく、百姓の仕事に四苦八苦する。非常時の時局における消費節約、勤労生活のなかで、幸福の意味を問う。筑摩書房版全集、第四巻。

109『雹害』

『新潮』、昭和14（1939）年1月。完全に農民になりきることができないをコンプレックスに感じている作家の主人公が、雹が降ってきたことを機会に、農民にとっての自然の猛威の深刻さを子供と一緒に学ぶ。筑摩書房版全集、第四巻。

110『海と山と』

河出書房、昭和14（1939）年2月。畠山というのんびりした文学青年が、マドロスに憧れ、田舎から横浜へ上京し、とうとう船に乗り込んでカルカタまで航海に出る物語。文学と生活の葛藤がユーモラスに描かれている。未完の自伝風長篇小説。筑摩書房版全集、第三巻。

111 『稲』

『国民新聞』、昭和14（1939）年3月。稲を刈る手伝いを頼んだ頼んでないという問答をする妻と「いそばあ」。その話に対してどちらにも理を認める夫。自然と国家の間に挟まれた個々人の生の苦しみを軽い文体でスケッチする。筑摩書房版全集、第四巻。

112 『流旅の人々』

春陽堂書店、昭和14（1939）年6月。山奥の飯場を渡り歩く現場作業員とその家族を群像として描いた飯場生活長篇小説。戦時の時局、日本の外にもいる「流旅の人々」としての名もなき土方たち意識して書かれた。筑摩書房版全集、第四巻。

113 『部落の顔』

『改造』、昭和14（1939）年6月。健康保険の集金係りの当番となった主人公。村民の家々を回り、コミュニケーションをとりつつ、貧しい家から金を取る行為に、自分が得るわけでもないのに罪悪感を感じてしまう。筑摩書房版全集、第四巻。

114 『還元記』

『文芸春秋』、昭和14（1939）年12月。鮎釣り名人の乙にアドバイスを貰いながら、日々、鮎を釣りに行く花田。釣れた鮎を売ることにより癒癒などを感じつつ、心身の疲れを回復させるために釣りに没頭する作家の姿が描かれる。筑摩書房版全集、第四巻。

115 『墓掘り当番』

『新潮』、昭和15（1940）年1月。四人の墓掘り当番が代わる代わるに墓を掘る。故人となった金さんの思い出を語りながら、話題は小説家であるにも関わらず田舎で百姓仕事をする花田へと転じていく。葉山のコンプレックスが垣間見れる。筑摩書房版全集、第四巻。

116 『安ホテルの一日』

『公論』、昭和15（1940）年1月。田舎からやってきた男は都会の安ホテルで不思議な老人と出会う。元マドロスという点で意気投合しつつ、男の家庭問題や百姓へのコンプレックスといった悩みが明らかにされていく。筑摩書房版全集、第四巻。

117 『食ひ気と色気』

『大洋』、昭和15（1940）年5月。マドロスにとっての色気（性欲）と食ひ気（食欲）を話題にした二部構成の短篇。隔離された船上での食欲と陸上で開放の機会を得る性欲。マドロスの生態をスケッチする。筑摩書房版全集、第四巻。

118 『話の華』

『文芸』、昭和15（1940）年8月。旅の途中の薬行商人がお休み処代わりに自宅を訪ねてくる。場所を提供するついでに、なんとなしに話していくと、次第に話が弾んでいく。椎茸、隣人の産婆、日本の大きさについて。筑摩書房版全集、第四巻。

119『最後の聖餐』

『海を越えて』、昭和15（1940）年8月。ボムベイ航路の船で働くライスコックの峰山は、熱気にやられたのか、段々気が変になっていく。或る夜、平山という石炭夫が峰山に食事を頼む。寛大さについての掌編。作者による附言がある。筑摩書房版全集、第四巻。

120『凡父子』

『月刊文章』、昭和15（1940）年9月。三十年の月日を隔てて語られる河辺。かつて父を慕っていた子供は、新しい父となって子供に接する。息子の中学受験を話題の中心として父子の関係性を時間の幅のなかで描く。筑摩書房版全集、第四巻。

121『潔斎』

『日本の風俗』、昭和16（1941）年1月。稲刈りの季節。新聞を読む花田は、東アジアの情勢に対する日本の新体制を予感する。その困難な状況のなかで、己ができることは何なのか。葉山の転向をよく示す小品。筑摩書房版全集、第四巻。

122『子を護る』

『改造』、昭和16（1941）年2月。山口村に越してきてから半年がすぎた。農民の仕事を十分にこなせない劣等感と病気の子供をもち、自己嫌悪を抱えなら、近衛第二次内閣の新体制に対応する作品を志す作家を描く。筑摩書房版全集、第四巻。

123『寄生虫』

『ユーモアクラブ』、昭和16（1941）年3月。愛する娘に蛔虫がとりついた。国家の非常時に際し、宿主を介して、栄養を要求してくる寄生虫を憎みながら、自分自身に巣食う「虫」に悩み始める。父娘の闘病記。筑摩書房版全集、第四巻。

124『義侠』

『中央公論』、昭和16（1941）年8月。小池小太郎や畑陽炎などが属するインテリ・グループの座談会に、以前文壇で活躍していたが、今は土方生活をしている遠山霞梢を呼ぶことになった。文学と生活の対立を問う。筑摩書房版全集、第四巻。

125『不思議な村—「義侠」続篇—』

『日本の風俗』、昭和16（1941）年9月。九月中旬、遠山霞梢は飯場を出た。文芸座談会に参加するためだ。人類の平和のような高邁な理想を抱きつつ、それと日常生活の卑俗な精神生活が相克

する。葉山『義侠』の続編。筑摩書房版全集、第四巻。

126『颯風』

『芸芸』、昭和16（1941）年8月。冬のある日、家の前に乞食の老婆がいた。同情するも、狭い家に泊めることもできず、少しばかりの金を渡して立ち退いてもらうが、そのあと後悔し始める。そして、戦争と農村の関係を考える。筑摩書房版全集、第四巻。

127『海に行く』

『改造』、昭和17（1942）年5月。息子に十分な教育を与えることができず、職業への心構えを寢床で説く父親。その子が商船学校に入学するが、前途は多難だ。我が子にエールをおくる小品。筑摩書房版全集、第四巻。

128『海の家へ』

『新潮』、昭和17（1942）年6月。「海の錬成道場」を構想しながら、花田の口から延々と語られる、現実のなかに含まれている夢の可能性。青年と国家に対する意識が顕著に現れている小品。筑摩書房版全集、第四巻。

129『朋あり』

『健民』（あるいは『保健教育』）、昭和17（1942）年12月。花田が木曾の峽谷に移り住んでから数年経った夏。花田は満州開拓団の壮行会のために鮎釣りをしていた。まだ見ぬ異国の地に、理想郷を実現する意欲が燃え上がる。筑摩書房版全集、第四巻。

130『多産系子孫分布図』

『職場の光』、昭和18（1943）年1月。金には子供が男女合わせて一五人いる。軍隊のように秩序立った残りの子供らとは別に、世界中に散らばった子供たちから届く手紙を紹介しながら、多産家族の一面を描く。筑摩書房版全集、第四巻。

131『懸垂』

『少女の友』、昭和18（1943）年4月。国民学校六年を修了する「ももえ」に最適な進路は何か。娘に懸垂の稽古をしながら、日本を守るために戦っている男児たちを紹介し、愛国心を煽る。ナショナリズムが表出している一作。筑摩書房版全集、第四巻。

132『深井農事指導員』

『旅行雑誌』、昭和18（1943）年10月。深井農事指導員は33歳の若さで、満州開拓団の農業を指導する。団員と共に勤労そのものを楽しみながら、「大東亜戦争下に於ける殉忠の国土」として仕事に没頭する。満州に行った葉山の心持ちが伺える短篇。筑摩書房版全集、第四巻。

133 『ある日の開拓村』

『文芸』、昭和18（1943）年11月。満州の双竜泉開拓団のトラックはガソリン切れで、立ち往生しているところから物語が始まる。三つの村からなる開拓団の共助と祖国愛に満ちた生態の一部をスケッチする。筑摩書房版全集、第四巻。

134 『開拓団に於ける生活』

『農政』、昭和18（1943）年12月。満州で村を作った開拓団は、共助の精神で互いに助け合って生活している。異邦の土地に種撒かれたように根付く人々の困難と葛藤を静かにスケッチする。筑摩書房版全集、第四巻。

葉山嘉樹全小説紹介

<http://p.booklog.jp/book/88553>

著者：荒木優太

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/arishima-takeo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/88553>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/88553>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ